

地方 紀民 行鉄

長野電鉄株式会社



善光寺に小布施、
沿線の人気観光名所には、
強い日差しを
ものともしない観光客の
笑顔が集う。

長野電鉄の沿線散策で、「どこへ行くつもり」なんて迷うことはない。そこには善光寺がある。長野といえば、何はともあれ善光寺。牛に引かれて善光寺参りならぬ、長野電鉄に乗って善光寺参りへ。

地下から始まる長野電鉄

長野駅から善光寺への最寄り駅である善光寺下駅まで、長野電鉄は地下を走る。5分弱の地下移動の後、下車した善光寺下駅は、等間隔に並ぶ柱に蛍光灯。古い時代の映画のセットに紛れ込んだような、ちょっと不思議な雰囲気。

トンネルに消えていく電車を見送っていると、広々としたホームにぼつんと一人、取り残される。風の抜ける音しかしない静けさに我に返って足早に向かった改札口周辺も、乗降客がすっかり消えて静まり返る。駅務室の奥に引込む寸前だった駅員さんに声を掛け、フリー乗車券を示して改札を出る。

階段を上り地上へ向かうと、次第に空気が重く、熱くなってくる。踏み出した地上の世界は、強い日差しにアスファルトが溶けるような炎天下。善光寺下駅から善光寺までは徒歩約10分。影踏みでもするように、日陰を選んで歩いていても、一步踏み出すごとに汗がにじむ。地下のせいか、空調のせいか、全体的にひんやりとした空気に包まれていた駅が恋しい。

こんな炎天下なら、善光寺もすいているに違いない？……そんなことはあり得ない。

暑さに負けず善光寺参り

長野県屈指の観光名所、善光寺の人気を甘く見てはいけな。休日の善光寺参道は、30℃を超える気温をもともせず参拝に来た善男善女が笑いさざめく。

暑い暑いというなだれ気味に歩いてきたにもかかわらず、参道の賑やかさを目にした途端、気分が浮き立つ。仲見世を冷やか、大きな山門をくぐり、本堂へ。薄暗い本堂の中は、参拝客で大賑わいにもかかわらず、何故か涼やか、さすがは聖域。ご本尊様と結縁ができるというお戒壇巡りは大人気で、どうやら順番待ちになりそうなので、お参りだけ済ませて、ひとまず本堂を出る。

境内では、6月から11月の毎月第2土曜日に、「手づくり」をコンセプトとした「善光寺びんずる市」が開催されている。そして本日は、運よく第2土曜日。本堂左手の庭園木々の間を縫う小道に市が立っている。

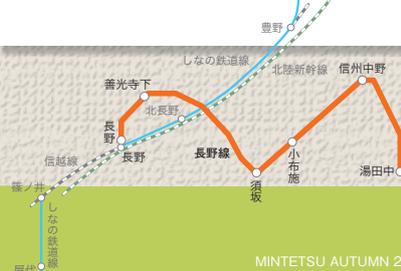
手づくりのアクセサリーや木製のおもちゃ、焼き菓子や果物を売る小さなテントのぞいたり、お抹茶を飲んで一息ついたり。数百円から数千円程度の品物を扱うお店が並び、十数万円と値のついたお琴を並べたお店を見つけてびびりたり。

まだまだ日は高いのに、木陰のせいか本堂の中と同じくらいに涼しくて、そぞろ歩きに時間を忘れ、気付けば小一時間が経過。そろそろ次の目的地、小布施に向かおうと境内を出た途端、暑さ再開。逃げるように、駅に戻

長野電鉄

【ながのてつどう】

長野駅から湯田中駅まで、全24駅を各駅停車で約1時間、特急では約40分で行く。沿線には善光寺や小布施などの観光名所を抱え、「ながでん」の愛称で知られる。



善光寺は大賑わい。びんずる市も開催中



乗降客が消えた善光寺下駅のホーム。トンネルを抜ける風の音しか聞こえなくなる



北斎館では北斎の肉筆画が見られる



小布施の町は栗一色

栗の町への期待が高まる

小布施駅までは善光寺下駅から約30分。善光寺下を発車すると、電車は間もなく地下から地上に出てきて、車窓の景色が楽しめるようになる。

日差しが差し込み明るくなった車内を見れば、ガイドブックを指差しながら何やら相談している親子連れや外国人観光客などで、8割以上の席が埋まっている。聞かえてくる楽しいげな会話の中には「栗」という単語がチラホラ。栗といえば小布施、小布施といえば栗。どつやら皆さんも小布施を目指しているらしい。

「○○の栗手羹か……。○○の栗のどら焼きが……。モンブランが……。漏れ聞こえてくるグルメ情報に耳をそばだて、「それじゃあ、私もそれを買おうかな」などと考えるうちに、小布施駅に到着。

駅舎は全体的にこげ茶色で栗のイメージ。ホームの柱に付けられた駅番号を示す表示こそ、他の駅と同じ、りんごの形をしているけれど、駅に付設する観光案内所と喫茶室の案内版には、こげ茶色の栗のマーク。栗商品を扱う老舗が集中する、小布施観光の中心地に向けて歩き出すと、道路に立つ標識や街灯、銀行の建物まで、同じようなこげ茶色で統一されている。景観を考えて採用された色調なのかもしれないけれど、小布施の町でこげ茶色といえば、連想されるのはやっぱり栗。町全体が栗色で、「栗の町」への期待が高まる。

栗の町は北斎の町

瓦屋根に土壁の堂々とした店構えの老舗に、甘い匂いを漂わせている小さな間口の気軽なお店。栗栗栗……。と期待してきた観光客を裏切らない多彩なお店が、景観と風情を保つ絶妙なバランスで寄り合う。

とはいえ、小布施は栗だけの町ではない。かの有名な浮世絵師・葛飾北斎が晩年、地元の名士・高井鴻山に招かれて逗留していた「北斎の町」でもあるということで、老舗が連なる中心地の一角には、北斎の肉筆画などを展示する美術館「北斎館」がある。

開催中の特別展をのぞくと、北斎をはじめ喜多川歌麿や歌川豊国などの作品がずらり。芸妓などを描いた美人画は、同じ構成の絵なのに印象がまったく違ったり、描かれる女性の髪形がさまざまだったり。一見、似通って見えるものも、ゆっくり見比べると違いが見えて、なかなか楽しい。父親の解説を聞く小学生くらいの男の子が、「顔がみんな一緒だ」と素直な感想を述べているのも、また面白い。美術館を出ると、長い夏の日も傾きつつある。そろそろ最後の栗菓子選び。電車内で小耳に挟んだ情報を基に物色。お菓子選びに悩むと同類か、見たような顔とあちらこちらの店で行き合い、あいまいな笑顔を交わす。あんまり何度もすれ違つのはばつが悪。さっさと決めてしまおうとは思いつけれども、選びきれない。仕方ない、気になるものを少しずつ、この際、全部買って帰ろう。



小布施駅には特急車両「2000系D編成」が保存されている



たくさんの観光客が小布施の街を訪れる



今年の栗はまだ緑